

氏 名 <sup>チャワーリン</sup> <sup>サウエッタナン</sup>  
**CHAVALIN SVETANANT**  
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)  
 学位記番号 人 博 第 191 号  
 学位授与の日付 平成 15 年 3 月 24 日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
 研究科・専攻 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻  
 学位論文題目 心のあり方を表現する語彙の対照研究  
 ——日本語とタイ語の場合——

論文調査委員 (主査)  
 教授 内田賢徳 助教授 島崎 健 助教授 須田千里  
 教師 スワンナー・クリエンクライペット(大阪外国語大学)

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語とタイ語における「心のあり方」を表わす語彙の体系、歴史的な用法、及び意味構造について論じたものである。対照研究は、多く双方の現代語という共時態を対象として行われるが、本論では、現代語のみならず、遡って古典資料を調査し、通時的・歴史的な変化の相を考慮に入れて、共時・通時両面を動態的にとらえ、それぞれの通時的な重層の総体を比較・分析することにつとめた。

第一章で「気」「こころ」と「/caj/」について次のように述べた。

日本語「気」と「こころ」は、語史的な由来にちがいががあるため、「アンテナ」と「テレビ」というような関係で機能分担的に人間の精神活動を表わしているのではなく、むしろ漢語と和語の意味が互いに重なり合いながら、日本語の「Heart Words」の体系を構成している。一方、「人間の感情・理性などの精神活動をつかさどるもの」というところから派生したタイ語の「/caj/」は、「気」と「こころ」よりも具体的に感じられていて、「自己が自己であること」を表わしたり、「/tat caj/」(/caj/を切る＝あきらめる)「/châp caj/」(/caj/を計る＝比較考慮する)「/kin caj/」(/caj/を食べる＝(自)感動する、(他)疑う)「/caj hăaj/」(/caj/が消える＝驚きで/caj/ (魂)も消し飛んでしまいそうな心的状態)など形あるもののように示したり、さらに「靈魂」という転義にまで使用されたりする。このような、生き生きと性質を量的に明示することは、中世の日本語に使われた「気を伸ばす」「気を呑む」「気を直す」というような「気」の用法に類似するところがある。しかし、そのような量的な用法は、日本語では衰退し、「気」は質的に用いられるようになる。

第二章では、日本語の「やさし」とそれに対応するタイ語の「/caj dii/」を比較・分析した。「/caj dii/」は「/caj/」(こころ)が「/dii/」(良い)の意で、優しい、親切などと日本語訳される。「やさし」は、「消え入りたい」という主観的な感情を表わす形容詞から、その感情の対象について規定する属性形容詞に転化し、そこで「優美」や「思いやりのある」または「扱いやすい」という意味への展開を辿った。それと対照的に、タイ語の「/caj dii/」には、初めてタイ文字化された十三世紀以来、あまり大きな意味変化が起こっていない。さらに、人と人との相互関係から成立した「やさし」の本質と異なっており、他者に対する表面が如何であろうとも、対象そのものに好意を持つ根本的な本心さえ認められれば、それで人間の道徳心に深く関わる「/caj dii/」とされる。

第三章と第四章では、「かしこし」と「/kreep/」における複雑な感情を表わす意味の二面性を考察した。「/kreep/」は、相手に対してかしこまる態度を表わし、日本古語の「かしこし」に対応する。「/kreep/」はタイ語最古の文献「ラームカムヘーン大王の碑文」(13世紀)に見られ、神が、王の十分な祭祀を得られない限り、王を「/kreep/」しないというような報恩的な関係を表わしている。それに対して、「かしこし」の古い例は絶対的な威力に対する関係を示し、そこから種々の意義へと展開した。故に、両者は「恐怖の念」及び「尊敬の念」という本質的な特徴を共有するにもかかわらず、異なった意味の展開をもち、ここでもタイ語「/kreep/」の方が古い質を保っている。

第一章から第四章を通して、古代からそれほど変わりのなかったタイ語の語彙体系に比して、日本語の語彙体系は意味変化が激しく、動的（Dynamic）であることが明らかになった。その中で、タイ語の表現は日本語の辿った意味変化のどれかに類似するという場合が見られたものの、「/caj/」が「心臓」を表わす意味をもつなど、日本語に比して身体に近しく「心のあり方」を一体的に言い表わす特徴をもっている。それに対して、ほぼ時代を通して日本語の表現は変化に富んで複雑な様相を呈している。

八世紀から文字資料の存する日本語に対して、タイ語の文字資料は十三世紀からしか見られないという両言語史の差はあるが、「心のあり方」を表わす語彙について分析、論述してきた如上の差は、両言語の属する文化の差につながるものと考えられよう。

## 論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、心のあり方、即ち広く意志、情緒、態度といったことについての、日本語とタイ語の語彙を比較対照し、その類似と相違を考察するものである。

第一章は、その基層をなす、タイ語「/caj/」とそれに対応する日本語「心」「気」の比較分析で構成される。「/caj/」は、心的諸現象の表現に広汎に現れ、その中心を実体的に言い表している。「/caj/」が少ない、卑小である」と言えば怒りっぽいことを意味し、「/caj/」が広い」と言えば度量の大きいことである。また「/caj/」が浮かぶ」と言えばぼんやりすることであり、「/caj/」が枯れる」は落胆である。こうした現象は、一見日本語の「気が小さい」「心が広い」といった表現と類似する。しかし、日本語のこうした表現は概ね慣用的であり、「気が小さい」といっても、何かが現実他に比して少量であると実感することはない。しかし、タイ語のこれらは、時代を通してその量性を実感するのであり、「/caj/」は個人の中で増大したり（満ち足りること）、減少したり（がっかりすること）する。これらが慣用的に固定した表現でないことは、「/caj/」を含む表現が多数また多様に見られることに明らかであろう。本論文末には、タイの古語も含めたその詳細な一覧が付されている。タイ語研究においても新しい語彙集である。

その「/caj/」に対応する日本語は、「心」と「気」である。「心」と「気」の使い分けは、既に幾つかの研究の関心を寄せるところであり、また巷間に種々の俗説を見る。使い分けへの関心が、使い分けの内部に止まる限り、そこに求められるのは意味的な機能分担である。「気は心」という諺などを通して、「気」は「心」を外部へと開く触手、「心」の延長として捉えられる。本論文にあるのは、その立場と異なる。「/caj/」で一元的に言い表していることがどのように二元的に言い表されるのか、関心はそこに始まり、「心」と「気」の語誌が顧みられる。そもそも「気」は漢語として受容した語であり、固有日本語としての「こころ」とは同次元ではない。古代日本語にまで溯って調査することから、本論文は注目すべき現象を見出している。「気」が「心」と並んで、日常的に日本語の中に現れるのは、中世、文献としては『日葡辞書』が多くの例文をあげる辺りにまで降り、かつそこに見られるのは、後世の「気」に比して量的な把握である。「気を呑む（苦しみ悩む）」「気が尽くる（精神が衰える）」といった表現から導かれるのは、「心」の延長として機能分担をもつことよりは、人の精神性を外貌的に捉えた言い表しとして、人の内側に「凝る」ものとしての「こころ」との、重なり合いながらもたれる対立である。それは固有語と外来語という本来あった位相的な対立に由来する。

こうした語誌は、これまで日本語研究の中でも辿られたことがなく、申請者の、日本語の外からの意味感覚がもたらした成果であり、日本語研究に新たな知見を与えた。

また、この対照研究が、現代語相互の共時的な比較対照という、日本における対照研究の一般的に取る方法を超えて、通時的に重層する総体を対象としたところも、この分野で新見を得る方法的な基礎を与えることとして評価されよう。

第二章は、「/caj/」を含む語彙の中でも多用されるタイ語「/caj dii/」と、対応する日本語「優しい」との比較分析である。日本語が「気」や「心」を含まない一語の形容詞で対応することは、双方の成立の差を考えさせる。「/caj dii/」の「/dii/」は、良いの意で、「/caj dii/」は優しい、親切などと訳される。その対応は、しかし、「やさし」が、本来は、風格に卓越する相手に接して、消え入りたいとさえ自己を思ってしまう感情を表すことに立てば、一つの結果と見えてくる。「優しい」という相手への評価は、その本来の意味が対象へと転化した用法であり、それは「環境にやさしい洗剤」のような対象の属性規定にまで広がる。一方「/caj dii/」は、時代を通して、相手の言動から認められる、その人の本性に根ざす評価

である。それは日本語「やさし」が辿った大きな変化のある一齣と結果的な対応をもつに過ぎず、二つは同様の評価をしているように見えても、拠って立つところは異なっている。「/caj/」の実体性はここにも現れている。

通時的な総体を比較対照する申請者の方法は、ここで類似、対応するように見える二つの、根柢にある差異を明快に指摘する確かさを見せている。

第三、四章は、「/caj/」を含まない語を取り上げ、共に対象への畏怖や敬意を多義的にもつタイ語「/kreep/」と古代日本語「かしこし」との比較分析を行う。「/kreep/」は、13世紀の碑文に古例をもち、そこでは王の祭祀に対する神の報恩的な態度としてある。一方古代日本語「かしこし」は、まず神の示現に戦く人の態度として現れる。共に力あるものへのかしこまる態度を表しながら、関係は異なっていて、その違いは、両語の語誌的な差として展開する。即ち、「かしこし」が「やさし」同様、主観の側から対象の評価、規定へと転換するのに対して「/kreep/」は主観的な態度であることを離れず、相手の振る舞いへの懸念や立場への配慮といった主体の態度へと展開した。

「/kreep/」についてのここでの分析は詳細であり、13世紀を最古とするタイ語文献を通史的に見渡して語誌が辿られる。「かしこし」についての語誌は既に明らかであるが、それはこの対照によって相対化され、新しい視点から見られている。第三、四章で際立つのは、日本語の通時的な展開についての知見がタイ語について同様の知見を求め、それが日本語の語誌を相対化するという、二つの言語の対照という方法の真に目指すべきことがささやかな実現を見ているということであろう。

本論文は、日本語についてもタイ語についても新しい知見と視点を与えたことで十分評価できるが、全体を特徴づけている今一つのこととして、文化的な差異を言うことへの抑制があげられる。言語事実は誘惑的であり、そこから文化的な差異を指摘することは容易い。しかし、誘惑である限り、導かれることは短絡した恣意でしかない。それを断ってことばのうちに止まること、言語の学に携わる者の基本的な慎みがここにある。

タイ語の中に生い立ち、日本語を学び、意味への小さな疑問が研究へと育ち、そして論の形をもった時、関心は内なるタイ語を反省的に捉えることへと展開している。日本語の研鑽と研究が、傍らに自己の内なる母語の歴史への目覚めをもたらしたという点で、本論文への軌跡は、タイ語の中に生きる自己の内省を深めることでこそあっただろう。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年1月28日、論文内容及び関連事項について試問を行った結果、合格と認めた。